

# イギリス民話の寓話・教訓話 及びフェアリーテールに現れる植物

池田 広昭

一般科

Plants that Appear in Fables, Exempla and Fairy Tales of British Folktales

Hiroaki IKEDA

## Abstract

The purpose of this paper is to present a comprehensive list of plant names, along with their frequencies, which appear in Part A, Volume I of *A Dictionary of British Folktales in the English Language*, by Katherine M. Briggs. How these plants are dealt with in the folktales is also described.

Key Words: Plant, Folktale, Britain

## 1. 序

本稿は Katherine M. Briggs の *A Dictionary of British Folktales in the English Language* の Part A, Volume I (もともと 4 分冊で出版されているものの第一分冊に当たる。) に収録されている民話に順に目を通し、そこになどどのような植物がどのくらいの回数登場し、どのような文脈に現れ、どのような扱いを受けているかをまとめたものである。Volume II 以降と全体については機会を改めてまとめる予定である。

Briggs はその *Dictionary* の中で民話を大きく narratives と legends の 2 つの parts に分け、それぞれの part に volume を 2 つずつあてているが、その最初の volume には narratives のうちの fables and exempla と fairy tales が収められている。本稿はこれら寓話・教訓話とフェアリーテールに分類されている民話に関してまとめたものである。Briggs の *Dictionary* における fable はイソップ寓話のたぐいであり、exemplum は教会で説教をする際の教訓的たとえ話である。また fairy tale は物

語としての筋 (plot) を明確に備え、かつ超自然的な要素のある民話のことを指し、必ずしも妖精(fairy)が出てくる話とは限らない。反対に単に妖精が登場するだけでも Briggs は fairy tale に分類していない。妖精は登場するが物語としての筋が明確でない話の多くは Legends という part の fairies という項目に収められている。

## 2. 植物の種類と頻度

Katherine M. Briggs の *A Dictionary of British Folktales in the English Language: Part A, Volume I Fables and Exempla, Fairy Tales* (4 分冊の場合の第一分冊に当たる) に収録されている民話に現れる植物の種類と登場の頻度、及び扱われ方を一覧にして以下に示す。

植物名を拾い出すにあたっての規準として以下の事項をもうけている。すなわち名詞以外の品詞も採る。ただし一覧での見出しは名詞形に統一する。(動詞として使われている pepper、形容詞形の rosy, ashen もそれぞれ pepper, rose, ash の見出しのもとに入っている。) 複

合語の一部として含まれている植物名も採る。

(gingerbread の ginger、beanstalk の bean 等。) 方言形については、それが標準英語の語形の訛ったものである場合は、その方言形を別の見出しとして立てず標準英語の語形のところに入れる。(Yorkshire 方言の tonnep と Scotland 方言の rash はそれぞれ turnip、rush の見出しに入る。) しかし標準語形とかけ離れた方言形は別の見出しとして立てる。(moss の意の Scotland 方言 fog、daisy の意の Scotland 方言 gowan はそれぞれ fog、gowan という見出しとして立てる。) 固有名詞 (人名、地名等) として使われている植物名も、本来の植物の意味合いが生きていると思われることが多いので、採用する。(Lemon、Orange、Lily 等の人名、Broomfield という地名、Daisy という牛の名等。) 植物名には日本語訳を付すが植物学的正確さは意図しない。おおまかな参考程度である。

植物の頻度は合計登場回数ではなく、ある植物がいくつかの民話に現れているかを鍵として整理してある。Briggs の *Dictionary* 中の民話は採録形態 (Briggs は form と言っている) が統一されておらず、あるものは出典からの完全な引用、あるものは要約版、あるものは短縮版という体裁である。また要約版と短縮版の区別も明確ではない。このように採録形態が一定しない状況ではただ単純にある植物名が合計何回登場するかを規準として頻度をまとめるのは適当ではない。要約版、短縮版が多数混じっているとすれば、当然植物の種類も合計登場回数も、全部完全版だったとしたときに比べて減るのは明らかだからである。特に合計登場回数の減少は著しい

であろう。しかしある話にとって重要な植物はたとえ要約版であっても省略されない、逆の見方をすると、要約版に現れる植物はたとえたった一回であってもその話にとっては重要なものである (ことが多い) であろうから、ある植物がいくつかの話に登場するかを第一規準に据えて頻度を整理するのがより適当であると考えられる。ただし合計登場回数も参考までに示しておくことにする。

方言の激しい民話には anglicized version が併録されていることがあるが、このような場合は標準英語版を代表として扱っている。

植物がどういう扱いを受けているかについては、主題、モチーフ、背景描写、修辭の4つの項目を設けて整理している。主題は植物が話の中心または擬人化して主人公になっている場合、もしくはそれに近い場合を表す。モチーフは民話を分類する際に使う話素のことで、植物が話の展開の上で欠かせない要素である場合、またはこれに準ずる場合を表す。背景描写は主題でもモチーフでもなく背景の描写またはいろいろな説明に現れている場合を表す。修辭は比喩など文の飾りとして植物が用いられる場合を示す。これらの項目にのせている数字はいくつの話にその植物が現れるかを示している。各項目への割り振りは重要度の高いほうに傾斜した判断になっている。

「ほかの資料」の項目のところには Chaucer, Shakespeare, Mother Goose (イギリスの伝承童話) にその植物への言及があるかどうかを示してある<sup>2)</sup>。言及がある場合はそれぞれ C, S, M という記号でそのことを示した。

表 1. イギリス民話の寓話・教訓話及びフェアリーテールに現れる植物

植物名	日本語訳	登場する話の数	合計登場回数	主題	モチーフ	背景描写	修辭	ほかの資料
grass	イネ科の野草	17	24	0	4	11	1	CSM
apple	リンゴ	14	56	2	9	3	0	CSM
corn	穀物、特に wheat	10	16	0	6	5	0	CSM
oak	オーク	10	19	2	2	6	0	CSM

植物名	日本語訳	登場する話の数	合計登場回数	主 題	モチーフ	背景描写	修 辞	ほかの資料
moss	コケ	9	38	0	4	2	0	SM
tea	茶	9	14	0	0	9	0	M
orange	オレンジ	8	32	0	3	1	0	SM
rose	バラ	8	21	0	3	1	2	CSM
thorn	イバラ	8	25	0	8	0	0	CSM
barley	オオムギ	6	8	0	2	4	0	CSM
primrose	サクラソウ	6	14	2	2	2	1	(C)SM
ash	トネリコ	5	12	2	1	2	0	CSM
nut	堅果、木の实	5	17	0	3	1	0	CSM
potato	ジャガイモ	5	8	0	1	4	0	SM
rush	イグサ	5	32	0	5	0	0	CSM
bean	豆、ソラマメ類	4	32	4	0	0	0	CSM
cabbage	キャベツ	4	8	0	3	1	0	SM
cherry	サクランボ	4	4	0	2	0	2	CSM
gooseberry	グースベリー	4	14	0	4	0	0	S
lemon	レモン	4	12	0	1	0	0	SM
pea	エンドウ	4	6	0	3	0	1	(C)SM
pear	ナシ	4	6	0	3	1	0	CSM
plum	プラム、スモモ	4	5	0	2	1	1	CSM
tobacco	タバコ	4	6	0	2	0	2	M
berry	液果、漿果	3	3	0	1	1	1	CSM
broom	エニシダ	3	6	0	2	0	0	CSM
fir	モミ	3	3	0	1	2	0	C M
fog	moss コケ	3	6	0	3	0	0	
ginger	ショウガ	3	6	0	2	1	0	CSM
nettle	イラクサ	3	4	0	2	0	1	CSM
turnip	カブ	3	9	0	1	2	0	SM
wheat	コムギ	3	8	0	2	1	0	CSM
whin	furze ハリエニシダ	3	4	0	1	2	0	
birch	カンバ	2	2	1	0	1	0	CS
bramble	blackberry 類の木苺	2	2	0	1	1	0	CSM
daisy	デージー	2	4	1	0	0	0	CSM
elm	ニレ	2	3	0	2	0	0	CS
flax	アマ	2	13	0	2	0	0	CS
hazel	ハシバミ	2	2	0	2	0	0	CSM
ivy	キヅタ	2	2	0	0	1	1	CSM

植物名	日本語訳	登場する話の数	合計登場回数	主題	モチーフ	背景描写	修辞	ほかの資料
lily	ユリ	2	11	0	1	0	0	CSM
mould	カビ	2	2	0	0	2	0	
oat	カラスムギ	2	2	0	1	1	0	CSM
pepper	コショウ	2	4	0	0	2	0	CSM
pine	マツ	2	2	0	1	1	0	CS
thistle	アザミ	2	4	0	1	0	1	CSM
walnut	クルミ	2	2	0	2	0	0	CSM
acorn	ドングリ	1	1	0	1	0	0	CSM
almond	アーモンド	1	1	0	0	1	0	(C)S
arrowroot	クズウコン	1	6	0	1	0	0	
beech	ブナ	1	1	0	0	1	0	C
blackberry	ブラックベリー	1	1	0	1	0	0	CS
blackthorn	リンボク	1	2	0	1	0	0	
bracken	ワラビ	1	1	0	1	0	0	
briar	イバラ	1	2	0	1	0	0	CSM
bullas	wild plum スモモ	1	6	0	1	0	0	C
burdock	ゴボウ	1	1	0	1	0	0	S
buttery blossom	エニシダのことか	1	1	0	0	1	0	
buttery bush	エニシダのことか	1	1	0	0	1	0	
carrot	ニンジン	1	1	0	0	1	0	SM
cedar	ヒマラヤスギ	1	1	0	0	1	0	S
clover	クローバー	1	1	0	0	0	1	SM
cowslip	キバナノクリンザクラ	1	8	1	0	0	0	S
culver-key	cowslip のこと	1	1	0	0	1	0	
daffodil	ラッパズイセン	1	1	0	0	0	1	S
dandelion	タンポポ	1	2	0	1	0	0	
elder	ニワトコ	1	1	0	0	1	0	S
fern	シダ	1	1	0	1	0	0	CS
forget-me-not	ワスレナグサ	1	1	0	0	1	0	
furze	ハリエニシダ	1	1	0	0	1	0	S
geranium	ジェラニウム	1	1	0	0	1	0	
gorse	ハリエニシダ	1	1	0	1	0	0	(S)
gowan	daisy ヒナギク	1	1	0	0	0	1	
hawthorn	サンザシ	1	1	0	0	1	0	CSM
heath	ヒース	1	2	0	0	1	0	CS
heather	ヒース	1	1	0	0	1	0	

植物名	日本語訳	登場する話の数	合計登場回数	主題	モチーフ	背景描写	修辞	ほかの資料
hecklepin	thorn のことか	1	3	0	1	0	0	
hemp	アサ、タイマ	1	1	0	0	1	0	CSM
holly	ヒイラギ	1	1	0	0	1	0	SM
hop	ホップ	1	1	0	0	0	1	
kail	チリメンキャベツ	1	3	0	0	1	0	M
lint	アマ	1	1	0	1	0	0	
onion	タマネギ	1	1	0	0	1	0	CSM
pilgrim's weed	不明	1	1	0	0	1	0	
Quarenden	リンゴの種類の名	1	1	0	0	1	0	
raspberry	ラズベリー	1	1	0	0	1	0	
rowan	ナナカマド	1	1	0	1	0	0	
seaweed	海草	1	2	0	1	0	0	
St. John's Wort	オトギリソウ	1	2	1	0	0	0	
strawberry	イチゴ	1	6	0	1	0	0	SM
watercress	オランダガラシ	1	3	0	1	1	0	
witches' broom	mistletoe ヤドリギ	1	4	0	1	0	0	
wort	草	1	1	0	0	1	0	CS

### 3. 種類と頻度の傾向

Chaucer、Shakespeare、Mother Goose に登場する植物は、池田（1997）「Chaucer の言及している動植物名」にもまとめられているように、三者間でその種類、相対的頻度において全般的に似た傾向を示すが、Briggs の集めたイギリス民話の寓話・教訓話、フェアリーテールでも全体的にはこれらと大体同じ傾向を示している。しかし、一部民話としての性格によると思われる相違点も見られる。

種類の面で Chaucer、Shakespeare、Mother Goose との共通点として生活に密着した植物が多いということがあげられるが、寓話・教訓話、フェアリーテールではその傾向が一層強い。穀物、果物、野菜、香辛料、家畜の飼料、繊維、木材等有用植物と言われるものと、イギリスの家の周辺や野原でよく目にする野草、樹木が大部分

である。観賞用植物が少ない点も Chaucer、Shakespeare、Mother Goose と一致する傾向である。ここでも民話のほうがその傾向がはっきりしている。

しかし lavender、rosemary、mint、chamomile、sage など一群のハーブと言われる薬用香草が出てこないところは三者と傾向を異にするするところである。また violet が表中に見えないのも注目される。この花は三者のいずれにも登場し好ましい花の代表のような扱いを受けているからである。

表の「ほかの資料」の項目を見ればわかるように Chaucer、Shakespeare、Mother Goose のいずれにも現れない植物が表中に見られる。すなわち fog、whin、mould、arrowroot、blackthorn、bracken、buttery blossom、buttery bush、geranium、gowan、heather、hecklepin、hop、lint、pilgrim's weed、Quarenden、raspberry、rowan、seaweed、St. John's Wort、watercress、witches' broom である。このうち fog、

whin、gowan、hecklepin は明らかな方言形であるが、植物自体は一般的なものである。イングランドは周辺部に比べ発展が早かったので民話が早くから失われ、ウェールズやスコットランドに民話が残ることになった。そのため民話にはよく方言が登場する。ここに見られる方言形もそういった例である。この4種の方言形以外の植物も概して生活密着型の植物である点は全体の傾向に沿っている。

頻度のほうに目を移すと、ここでも Chaucer、Shakespeare、Mother Goose と似た傾向を示している。三者で相対的頻度の高いものはここでも頻度が高い。登場する話の数が上のほうから4, 5くらいまでの植物はイギリスの文学や書き物あるいは民間伝承によく登場する植物である。

しかし三者と大きく違うのは rose の出現頻度の低さである。Chaucer と Shakespeare で他を圧倒して頻度の高かった rose がここでは目立たない位置に来ている。また rose ほどの圧倒的な頻度ではないけれど、三者で安定した人気を誇る lily の頻度が低い。これは民話では文の飾り、特に比喩が使われることが非常に少ないということが原因である。Rose、lily とともに女性の美の象徴として三者で比喩に多用されているのが、民話では（少なくとも、寓話・教訓話、フェアリーテールでは）比喩の使用頻度自体が非常に低いので現れないのである。民話も語りべの話した通りを記録したものから装飾過多の創作物語スタイルのものまで文体はいろいろであるが、全体としてはやはり修辭が少ない。

植物の名が全部で 93 種、合計登場回数は、要約版が多数含まれているので完全版に比べれば少なくなるはずであるが、616 回である。この数字は Chaucer、Shakespeare、Mother Goose と比較して絶対値は決して大きくはないが、植物名のテキスト中に分布している密度は民話のほうのはるかに濃密である。要約版が多数含まれているのにもかかわらずそうである。Shakespeare を除いてはテキストの総語数がわからないので数値化して比較することができないが、実際にそれぞれの文を読んでいると強く実感される。Chaucer や Shakespeare ではなかなか植物名に行き当たらないときが多いのに対して、民話ではそれほど待たずにすぐ植物名に遭遇する。Chaucer や Shakespeare では場所による分布密度の差が

大きく、分布のないところが広がっている中にたまにまとまって植物が登場するといった状況であるのに対して、民話のほうは、植物が主題になっているところでは当然密度が非常に高いが、その他のところでももっと平均して分布している。これは Chaucer や Shakespeare では植物は多くの場合修辭の一部として使われているのに対して、民話では話の欠かせない要素として、また背景描写としてもっと自然な形で登場することが多いということと大いに関係がある。民話の場合植物を取り除いてしまったら成立しなくなるものが相当数出てきそうである。しかし2作家たちの修辭にはそこまでの重要性はない。

本稿では扱わないが、動物のほうは民話の中心的要素であり、植物を数倍上回る登場の仕方をし、重要度は一層高いということを付言しておきたい。

#### 4. 主題または主人公となっている植物

植物自体が主役、つまり話の中心あるいは主人公になっている例、もしくは植物が話の中で非常に重要な役割を演じている例がいくつかある。表に現れる順に見ていくことにする。ただし、一つの話に2つ以上の植物が登場しどれも重要な場合、表中で先に出てくる植物のところで後から出てくる植物にも触れることがある。

Apple は伝承童謡でも植物の中で頻度が一番であり、イギリスの家庭の果物として日本のカキのように大変親しまれ重要視されていて、その樹木は樹木信仰の対象になっている。リンゴの木に豊作を祈念する童謡がいくつかあることにもこのことが反映されている。

このような童謡とも関連のある The Apple Tree Man という話があり、ここではリンゴの木が人間のことばをしゃべる。数あるイギリスの民話の中でも植物が口をきく話は動物のしゃべる話に比べれば決して多くはないが、リンゴはしゃべる植物の代表格である。父親の遺産が長男ではなく末の息子に相続されたが（田舎にはそういう習慣があったという。）、末の息子は長男がきらいで、おいぼれロバとやせた雄牛、それに破れ小屋しか渡さなかったが、その小屋にはリンゴの老樹が2、3本あった。長男は不平も言わずよく働きリンゴの木も勢いよくなった。クリスマス・イブの前日に末の弟が兄のところに来て、明日はけものがしゃべる日だから兄貴のロバに



宝のありかを聞くつもりだ、だから真夜中直前に起こしてくれと言った。当日長男がリンゴの木にリンゴ酒（サイダー）をそなえにいったところ、Apple Tree Man が話し掛けて、腐った根の下に金が入った箱がある、それはおまえのだから安全なところに隠して人には言うな、と言うのでそうしたら、さあ、弟を呼びに行けと言われた。弟が急いでやって来るとロバが雄牛に、このバカが宝のありかを聞きたがっているが、もうだれかがとったからないよと言っているのが聞こえた。このようにリンゴの木が、自分のことを忘れずよく面倒を見てくれる者に報いている。

もうひとつ apple が非常に重要な役割を演じる The King of England and his three sons という話がある。父王が病気になりそれをなおせるのは遠い国の金のリンゴだけだということで三人の王子たちが探しに出かけるという話である。よくあるように一番若い王子がその金のリンゴを手に入れるのに成功するのだが、途中幾多の困難に出会い、リンゴを手に入れた後も兄たちにだまされたり、お姫様との結婚のごたごたがあったりと、昔話としては大変長いほうの話である。しかしそういった筋はともかく、金のリンゴに難病をなおす力があるとされ、そのリンゴをめぐる話が展開していくということにここでは注目しておきたい。金のリンゴというのがリンゴではなく中近東のほうのオレンジではないかという説もある。金のリンゴ探しというのはあきらかにギリシア神話の影響があると考えられる。

Oak も樹木信仰の対象となる木である。Silvertrees and Timbertrees という話では oak と birch が互いにしゃべり、人間とも口をきく。Timbertrees はオークで思慮深いおじいさん、Silvertrees はカンバで若くて美しいが思い上がった女性という設定になっている。オークのほうは森の縁、カンバのほうは湖のそばに生えている。カンバは自分の美しい姿をその水面に映してみるのを楽しみにしている。それで枝をその方向に伸ばして道をさえぎり皆を困らせている。風もブタ飼いかも森の動物もカンバが若くて美しいことは認めているのだが、枝が道の邪魔になるので別の方向に伸ばすようにと言う。しかしカンバは水面に美しい姿を映すことができないのがいやでそれに従わない。そして皆がそろってカンバに witches' broom が取り付いているのが気に入らないと言う。Briggs の註

によると witches' broom とは mistletoe ヤドリギのことである。今ならまだ間に合うというオークの忠告にも従わず、枝を邪魔になるほうに伸ばすことをやめようとせず、かえって、あなたにもヤドリギがついているのを知っている、皆がヤドリギがいやだというのならあなたのほうこそヤドリギを取り除くべきだとオークに口答える。オークのヤドリギについてはオーク自身もずっと前から知っているのだが、皆は何も言わないのである。コマドリとミソサザイの親切な忠告にもカンバが耳を貸さなかったその翌日ドルイド僧たちがやってきて道の邪魔になっているカンバの木を切り倒させてしまう。その木でたき火をしながらヤドリギがきらいだという。僧たちは Timbertrees の守っていたカンバの銀の枝も切り取って持って行ってしまい、Timbertrees は寂しがる。欠点（ヤドリギ）があっても慕われるものと見かけが美しくてもちょっとした欠点が目立つものが対比される、民話としてはかなり特異な、あからさまに寓意色の濃い、まるで創作童話のような話である。

オーク信仰がもっとはっきり出ている The wonderful wood という話がある。乙女を捕らえて殺すのが好きな悪王がいた。親たちは娘を隠して王の目に触れないようにしていたが、ある娘と一緒に住んでいるおばあさんが病気でどうしても自分で出かけなければならなくなった。王が追ってきたのに気づいた娘は森に入りオークの木にお辞儀をした。そしたらオークの木は町のほうへ通してくれた。王が剣を持って追ってきてオークの木を呪った。すると大枝が落ちてきて王は首の骨を折って死んでしまった。王を探しにきた家来たちが王を見つけて、オークの木を切り倒そうとしたところ、オークの木はうなり声をあげ自分の家来の木たちに王の家来を取り囲ませた。それで王の家来たちは森から出られなくなった。ここではオークは勸善懲惡の神木である。

Primrose は人間にとって良い植物であり、妖精の花としてもよく知られている。Crooker という話には primrose が St. John's Wort と daisy といっしょに魔除けの植物として登場する。旅人が夕刻も深まったところ Cromford への道を進んでいると老婆が現れて夜この道に行くのは危ない、しかるべき手助けがなければ Crooker から身を守れない、これを持っていくようにとオトギリソウの花束をくれた。まえに小鳥を助けてくれ

たおれだということだった。その後同じようなことが 2 回あり、サクラソウとヒナギクの花束をもらい、ほかの注意も受けた。それぞれウサギと雌ギツネとその子をおれたおれということだった。真夜中に **Cromford Road** を通っていると側の川が逆巻き、一本の大樹の枝の影がまがった手のように襲い掛かってくる。**Crooker** だ、と思って左肩越しにヒナギクの花束を投げた。すると川が「よこせ」と言いパシヤンという音がした。この時追手の影が消えた。しかしまた影が襲ってきたので今度はサクラソウの花束を投げて逃れた。三度目にはオトギリソウの花束を木に向かって投げつけた。木はすごい叫び声をあげ、川は吠え、旅人は橋のお宮のもとに気を失って倒れ伏した。あたりの人たちはまた人が川と **Crooker** にやられたと思った。翌日見に行くと旅人は死んでおらず、川はおさまり岸に **ash** の木 (トネリコ) が立っていた。ここではトネリコは悪い植物という扱いである。

**Primrose** については **Goblin Comb** という話もある。よちよち歩きの女の子がサクラソウを摘んでいるうちに仲間とはぐれ、身を投げ出して泣いているとき持っていたサクラソウの花束が岩にあたった。すると岩が割れて妖精たちが現れ、女の子を慰めてくれ、金の玉までくれて、家まで送ってくれた。サクラソウを持っていたからであった。これを見た抜け目のない男が金の玉をもっと沢山もらってやろうと思ってサクラソウを持って **Goblin Comb** に行ったが、日が悪かったのか、サクラソウの数が違っていただけなのか、もくろみ通り妖精たちに気に入ってもらえなかった。それどころか自分自身が妖精たちにさらわれてしまった。**Primrose**、**culver-key** (**cowslip** のこと)、**forget-me-not** はどれも魔法の春の花だが花束に含まれる花の数が正しくないといけないという説明でこの話は締めくくられている。

**Ash** については上でも触れたが、ほかにも **The watchers by the well** というかなり長い話に登場し、重要な役割を演ずる。トネリコに関わりがないところはできる限り端折ってまとめると、悪霊の住む森に家を持つ猟師の助手が美人ではあるがはねっかえりの妻をめとる。この妻が言うことを聞かないときに夫が訴えるのがトネリコの杖である。それはさておき、新妻は家に近づいたときに何を見てもどこも変更してはならないと言われる。だがこれを守らずいろいろ問題を起こすのだが、その中

に **Wishing Well** に水汲みに行くと水が少しづつしか出ないのに業を煮やして、手桶が入るだけ広げようとして石を取り除いたり、苔の生えている泉の底を足で踏みこじったりしてしまうということがあった。このときは家の魔法のスペイン犬が見ていてうなづいたので気付いて、しまったと思った。見ると **Wishing Well** の上にはトネリコの木がありそこには赤いリボンが 7 つぶら下がっている。夫の好きな自分の巻毛にこれをつければかわいく見えて、おこられないかもしれないと思って、そのリボンをつけて家に帰って夫の帰りを待っていた。すると家の外で嘲笑う声がして、雨戸を叩いたり、引っかいたりする音がした。取り乱して二階に行くと、閉め忘れた窓から木の枝のような大きな手が中を探っていた。妻は気絶してしまうが、いつも助けてくれる魔女と犬に救われる。翌日窓の外には犬にかまれたあとが沢山ついている木の枝があり、泉の上からはトネリコの木が消えてなくなっていた。そして家のスペイン犬が脚を一本けがしていた。**Wishing Well** のトネリコの木がリボンを取り戻しに来たのだった。夫は帰ってくる途中で事態を察し、なにも聞かずに妻にトネリコの杖をくらわせた。その後は泉も修復され、泉には小さなトネリコの木も生え、その枝には赤いリボンも 7 つ下がっている。トネリコは神聖な木ではあるのだが少し怖い木として捕らえられているようである。

寓話・教訓話及びフェアリーテールでは **bean** はおなじみの **Jack and the beanstalk** の 3 つの版と類似の **Jack and the giant** にしか現れない。**Jack** は牛を売りに行く途中変な老人に会い、それをまくと一晩のうちに天まで達するというソラマメと牛を交換して家に帰る。家では母親がおこって、豆を窓から外に捨ててしまう。すると翌朝老人の言ったとおり豆が天まで届いていた。**Jack** はこれを上り雲の上の巨人のところに行っているいろいろな宝物を盗み出し、最後は巨人に追われて豆の木のところまで来てそこを伝って下に逃げ、巨人が降りてこようとするところを、いち早く斧で茎を切り倒し、巨人を殺し、宝物を自分たちのものにするというのが一番よく知られている版である。そのほかの版でもソラマメが天まで伸びるというところは共通している。

**Cowslip** には **The Green Mist** という次のような話がある。村一番にきれいな女の子がいた。**The Green Mist** が



明日こなければ私はもう生きていられない、もし毎年戸口に咲くキバナノクリンザクラの一本と同じくらいでも生き長えられれば満足だと言った。母は不吉な思いに駆られた。その翌日「緑の息吹」がやって来て、その後少女は日の射す日にはだんだんと元気になりますすきれいになっていった。ことにキバナノクリンザクラの咲く日は妖しいまでにきれいで人がこわがるほどだった。少女は決して母にこの花を摘ませようとはしなかった。ところがある日男の子がやってきてキバナノクリンザクラを一本摘み取ってしまった。少女は少年が帰るときになるまでこのことに気付いていなかった。地面にこの花が落ちているのに気付いて、衝撃を受け、あなたがとったのかと問いたです。少年は何も知らず、拾って少女に花を手渡す。少女はそれを手にとって部屋に駆け込み、花をもったまま寝込んでしまう。そしてキバナノクリンザクラが萎れるのと同時に衰え翌日死んでしまう。少女のことは聞いた *bogle* という妖精が望みをかなえたのだった。

## 5. モチーフとしての植物

モチーフすなわち話素として、またはそれに準ずるものとして登場する植物の数はかなり多く、民話にとって重要な意味を持っているが、本稿では一つ一つ丁寧に上げることはできないので、登場する話の数が 5 回以上の植物の中から特に興味深いものにしばってその扱われ方を簡単に見ておくことにする。

頻度一位の *grass* は実は特に興味を引く扱いは受けていない。鳥の巣の材料、あるいはヤギのえさなどとして登場するくらいである。

*Apple* のほうは民話の花形である。リンゴの実が魔力を持つものとして登場する話がいくつかある。*The black bull of Norway* では *pear*, *plum* とともに主人公である娘がそれを割ることによって窮地を脱することのできるお守りとして描かれている。リンゴの実がころがって道を教えてくれることもある (*The seven Brothers*)。食べると人の頭に角の生える魔力を持ったリンゴもある (*Fortunatus*)。魔法ではないが白雪姫が食べさせられて死ぬのもリンゴである (*Snow White*)。またリンゴの木は人間のことは解し、ときには人間のことは話すもの

として登場し、主人公を敵からかくまってやる (*The little watercress girl* と *The old witch*)。

*Corn* はちょっとした小道具として登場する。妖術くらべのモチーフで一方が穀物に化け、それを食うためにもう一方が雄鳥になったり (*The king of the black art*)、一方が穀物の雨を降らせると他方が鳥の群れを呼び出してこれを食わせたり (*The old smith*) する。主人公が雄牛の怪物に襲われたとき穀物を牛の前にまき牛がこれを食べるために突進を止めたので助かるという筋 (*The black cloak*)、5 羽のハトを捕まえるという難題を穀物をまいて徐々に納屋におびき寄せることによって成し遂げるという筋 (*Clever Pat*)、また同じく難題話で、空の鳥全部の羽でできたコートを作れという命令を *corn* を鳥に与えてその代わりに羽を一枚ずつもらって果たすというモチーフ (*Rashie-coat*) もある。

*Oak* はモチーフとしては特に取り上げるべきものがないので *moss* に移ると、篩で水を汲まなければならないで主人公が困っているときにカエルがコケと粘土で目をふさげばよいと教えるという重要なモチーフが見られる (*The bottle of water from the world's end well*, *The well of the world's end*)。方言でコケのことを *fog* というので *fog* も *moss* と同様の扱いを受けていると考えてよい。

*Orange* 売りの少女が *The glass house* に登場する。この女の子は貧しい子であるが、*De little fox* ではオレンジの皮が貧しい者の食べ物として言及されている。オレンジには貧しきとの連想があるかのごとくである。しかしその芳香が魔除けになるということが *St. George for merry England* に見えている。

*Rose* は *Food and fire and company* では好ましい香りと美をもつものとして扱われている。貧乏ではあるが親切なおばあさんがマナーハウスのバラが自分の小屋まで香ってくるのにうっとりし、うらやましく思っている。*Well dressing* 大会のとき前に親切にしてやった妖精のはからいでマナーハウスの赤いバラがすべてこのおばあさんのところに移され、おばあさんはこのバラの花びらで絵を描くことができ、これが審査員の目に留まり一等賞をもらうという話である。また八重のバラには幽霊を呼び出す力があるとされる (*Tam Lin*)。

*Thorn* は昔話では肉体的、精神的苦痛あるいは荒廃の

象徴としてしばしば現われる。Why the robin's breast is red ではロビンの胸が赤いのは磔になっているイエスのイバラの冠をとってやろうとして胸を傷つけたからということになっている。The friar and the boy、Jack the butter-milk、Three gold heads ではイバラの刺が体を傷つける肉体的苦痛を表している。Fairy Jip and Witch One-Eye では魔女に袋に詰められた主人公が機転を利かせて袋から抜け出し、自分の代わりにイバラを詰めて魔女を出し抜く。Lousy Jack and his eleven brothers では主人公が荒れ果てたイバラで取り囲まれた城へ、イバラで体に傷が付くのものともせずに入り込んで、姫からイバラを引き抜き長い眠りから目覚めさせる。Briar、bramble も thorn とほぼ同様の扱いである。Thorn の別名と考えてよいことが多い。

Barley は corn と同じように化け比べの途中で化けるものの一つに数えられている(The black king of Morocco)。また親指トムの鞭に使われている(The history of Tom Thumb)。

Primrose はすでに見たように大変好意的に見られている花である。妖精の花であって、妖精にこれを捧げることによって幸運を呼び寄せることができ、保護を得られる(One tree hill、Three gold heads)。

Ash は魔除けになる(The man who wouldn't go out at night)。

Potato に関しては、食べる物が何もない貧乏な家で、子供が腹をすかしてかわいそうだというので、せめて石を煮てジャガイモに見せるという話がある(The poor widow and her son)。

Nuts は幽霊や妖精と関係が深いようである。Ashypelt では幽霊が主人公の木の実に tobacco をもらいに来て、三日目に身の上話をし、それで積年の恨みが晴らされることになる。木の実は corn のように妖精の気をそらして、魔法の品を手に入れるのにも使われる (Kate Crackernuts)。また主人公が苦境に立たされたときに割ることによって魔法が行われその窮地を脱することができる力を与えられていることもある(The red bull of Norraway)。

シンデレラ物語の英国版として Rashie-Coat、Rashin Coatie、The red calf 等の民話がある。ここでは主人公が最初はみすばらしい rush のコートを着ていて、次第に高

貴な身分を表して行く。イグサはみすばらしさの象徴である。イグサではなく moss のコートを着ているバージョンもある(Mossycoat)。

登場する話の数が 4 回以下でも注目すべき植物がいくつかある。その一部は頻度 5 以上のものについて述べるときに補足的に扱った。それ以外のものを以下に取り上げる。

Broom は眠りを誘う花であり(The Broomfield hill)、妖精の木である(Tam Lin)。また cherry は妖精の好む食べ物である(Fairy Jip and Witch One-Eye)。Dandelion も妖精の植物である(Yallery Brown)。

Lily は life-token として扱われている(The fish of gold)。

Rowan は魔除けになる(The Laidley Worm of Spindleston Heughs)。

Gooseberry はリンゴと同じように人間の言葉を解し親切にしてくれる(The Green lady II)。

## 6. 結 語

民話にはイギリス人の植物に対する伝統的な見方が文学作品などよりもっとストレートな形で出ていて興味深い。しかし、Chaucer、Shakespeare、Mother Goose と相互に密接なつながりがあり、かなりの共通点があることは確かである。

民話には動植物が頻繁に登場するが、それは筋の上で必要だからであって、文の飾りとしてではないことが圧倒的に多い。民話の中にも時々動植物が装飾として沢山登場することがあるが、そういう場合はかなり書き手の手が加わっていて、原形が見えにくくなっているということを示していると思われる。

## 註

- 1) 本稿ではペーパーバック版を用いている。
- 2) Mother Goose の範囲は Miyakawa, Yoshihisa and Shigehiko Toyama. *A Handbook of Nursery Rhymes*. (Tokyo: Kenkyusha, 1985) と Opie, Iona and Peter. *The Oxford Nursery Rhyme Book*. (Oxford et al.: Oxford University

Press, 1985)に記載されている唄である。

### 参考文献

- Briggs, Katherine M. *A Dictionary of British Folktales in the English Language* Parts A and B. London: Paperback by Routledge, 1991.
- The Oxford English Dictionary* 2nd ed. on CD-ROM Version 1.13. Oxford: Oxford University Press, 1994.
- Wright, Joseph ed. *The English Dialect Dictionary* Oxford University Press, First published 1905, Third impression 1986.
- 加藤憲市著『英米文学植物民俗誌』富山房、昭和 54 年。
- 加藤さだ著『英文学植物考』名古屋大学出版会、1985 年。
- P・ミルワード著『イギリス風物誌』（スタンダード英語講座 11）大修館書店、1985 年。
- 成田成寿編集『英語歳時記普及版』研究社出版、1983 年。
- 安東伸介、小池 滋、出口保夫、船戸英夫編『イギリスの生活と文化事典』研究社、1986 年。
- 池田広昭「マザー・グースの中の植物」（『幾徳工業大学研究報告』A-11、昭和 62 年）。
- 「マザー・グースに現れる動物名」（『神奈川工科大学研究報告』A-13、平成元年）。
- 「Shakespeare の言及している動植物名」（『神奈川工科大学研究報告』A-16、平成 4 年）。
- 「英国で伝統的に関心を持たれている植物—Mother Goose と Shakespeare の比較—」（『神奈川工科大学研究報告』A-17、平成 5 年）。
- 「Shakespeare の言及している植物名の作品別分布」（『神奈川工科大学研究報告』A-18、平成 6 年）。
- 「Shakespeare の言及している動物名の作品別分布」（『神奈川工科大学研究報告』A-19、平成 7 年）。
- 「Chaucer の言及している動植物名」（『神奈川工科大学研究報告』A-21、平成 9 年）。